

## ILSI Japan 公開セミナー

第2回「健康寿命延伸に向け、各世代で解決すべき課題と対策とは：  
小児期編」

プログラム・講演要旨集

開催日時：2023年10月23日（月）13：20～15：30

（13：00より本セミナー接続先の URL から入室できます）

開催方法：Zoom ミーティング

主催：特定非営利活動法人 国際生命科学研究機構（ILSI Japan）  
栄養研究部会



## 概要・目的：

ILSI Japan 栄養研究部会は、日本における栄養と健康に関わる諸問題、とりわけ「健康寿命延伸」に結び付く科学的エビデンスの収集をテーマとし、その成果を、日本のみならずアジアや欧米諸国に向けて、広く発信することを目的として活動しています。そこで、「健康寿命延伸」という目標に向け、あらゆる世代のヘルスリテラシーを向上させるために、世代別（妊婦・乳幼児、小児期、中高年期、老年期）の栄養の課題を取り上げ、科学的エビデンスを基にそれらの対策について共有・議論することをセミナーの切り口とし、公開セミナーをシリーズ化して開催することにしました。

この度、「健康寿命延伸に向け、各世代で解決すべき課題と対策とは：小児期編」と題して、第2回公開セミナーを開催する運びになりました。

本セミナーでは、お二人の先生にご登壇いただきます。子供が健やかに育つための基本は、食べることです。そこで、まず噛むこと・飲み込むこと、すなわち「摂食・嚥下」をご専門とされている先生に小児期（成長期）の食べること・食べさせることの課題と対策、さらに口腔機能が将来の「健康寿命延伸」にどのように関わるのかについて、ご講演いただきます。そして将来の「健康寿命延伸」には、小児期の食生活が影響していると言われます。そこで、食行動学を専門とされている先生に、小児・学童の肥満の問題と対策や食育の推進に関わる施策を含め「小児期の食育」について、ご講演いただきます。

2023年8月

特定非営利活動法人 国際生命科学研究機構  
栄養研究部会

プログラム：

13:20～13:30 開会の挨拶 (ILSI Japan栄養研究部会)

13:30～15:30 ◆司会：(ILSI Japan栄養研究部会)

13:30～14:15 小児の口腔機能の発達と不全  
弘中 祥司 先生 (昭和大学歯学部 口腔衛生学講座 教授)

14:15～15:00 高度経済成長期の学校給食からみる子どもの体格とこれからの食育  
赤松 利恵 先生 (お茶の水女子大学 基幹研究院自然科学系 教授)

15:00～15:30 質疑応答 (座談会形式)

閉会 (ILSI Japan栄養研究部会)



ILSI Japan 公開セミナー 第2回「健康寿命延伸に向け、各世代で解決すべき  
課題と対策とは：小児期編」

小児の口腔機能の発達と不全  
昭和大学歯学部 口腔衛生学講座 教授  
弘中祥司

超高齢社会が何かと話題に上る、わが国の現在であります。次世代育成も大きな課題であることを忘れてはなりません。コンビニエンスストアとインターネット物流の恩恵で、いつでもどこでも食料品が効率よく手に入る便利な時代となりました。しかしながら、食べる機能は簡単に効率よく獲得できる機能ではなく、乳幼児が日々の食事の中で失敗と成功を繰り返して獲得する技術であります。

食品メーカーも、そんな世代の後押しにと「9か月頃からの～」とか「1歳頃からの～」という商品を次々に投入してきますが、1歳0か月と1歳11か月では、全身発達も、必要カロリーも、歯の本数も、そして口腔機能も異なっています。乳幼児の発達には個人差が大きく、また一定の順序性がみられます。当講座では、乳幼児の食べる機能の発達について、これまで疫学的な研究ならびに臨床研究を行っておりますが、保護者の抱える時間の無さ（時短）や焦り（他の子と異なる）が原因で、「偏食」、「まる飲み込み」、「噛まない」が生じている事例にも多く遭遇いたします。食べる機能を効率よく発揮するためには、歯を含めた「形態」と咀嚼や嚥下の「機能」、そして食べることを欲する「意欲」が重要となります。この3つは相互に関連しており、どれ一つ欠けても上手に食べる事が出来なくなります。

平成30年度診療報酬改定（歯科）において、新たに歯科疾患管理料：小児口腔機能管理加算（100点）が新設されました。これは口腔機能発達不全症という新たな病名が新設されたことによります。食べる機能の発達を科学的な視点から分析し、歯・口の発育を通して「育ち」を解説するとともに、不全となる原因や、口腔機能発達不全症の早期発見の重要性、ならびに口腔機能の再獲得についての対応法についても報告させて頂きたいと思っております。本講演が、子供たちの健全な育ちをサポートし、将来の健康寿命延伸にバトンを渡せたらと切に願っております。

## 【略歴】

- 1994年 北海道大学歯学部卒業
- 2001年 北海道大学歯学部附属病院咬合系歯科 助手
- 2002年 昭和大学歯学部口腔衛生学教室 助手
- 2004年 昭和大学歯学部口腔衛生学教室 講師
- 2006年 昭和大学歯学部口腔衛生学教室 准教授
- 2013年 昭和大学歯学部スペシャルニーズ口腔医学講座口腔衛生学部門 教授
- 2023年 昭和大学歯学部口腔衛生学講座 教授（現職）

ILSI Japan 公開セミナー 第2回「健康寿命延伸に向け、各世代で解決すべき  
課題と対策とは：小児期編」

高度経済成長期の学校給食からみる子どもの体格とこれからの食育

お茶の水女子大学 基幹研究院自然科学系 教授

赤松利恵

1954年から2021年までの10歳児の身長・体重の推移をみると、身長、体重ともに、右肩あがりだが、急激に増加している期間がある。日本の高度経済成長期の時期にあたる1955年から1973年である。この背景には、日本の食生活の変化が大きく影響していると考えられる。

戦後、日本人の栄養状態は決して良いとはいえなかった。そこで、さまざまな栄養政策が取られた。学校給食制度もその一環であった。高度経済成長期の前年の1954年に、学校給食法が制定されている。食糧も乏しい時期であったが、子どもたちの健やかな成長と健康を考え、給食は工夫されて提供されていた。

高度経済成長期の学校給食の経験がある182人に、当時の学校給食について調査を行った。対象者を学校給食の経験の時期で、3群に分けて検討した結果、どの年代でも、好きなメニューの1位は揚げパンであった。しかし、ソフト麺やミートソースは、昭和30年代の者では、好きなメニューとして登場せず、それ以降に洋食化が進んだことが確認できた。次に、高度経済成長期に学校栄養士として働いていた者(8人)を対象に、インタビュー調査を実施した結果、洋食化の背景には、「国際人を育てるためには洋食を食べないと」という思いがあり、日々、新しいメニューの研究をしていたことがわかった。

高度経済成長期の19年間で、日本の食生活は大きく変化した。特に、動物性のたんぱく質と脂質の摂取が増えている。この傾向は、高度経済成長期の終了時で止まり、その栄養素等摂取の状況は現在も継続している。高度経済成長期で、現在の食環境が完成したともいえる。我が国における栄養課題の1つの中老年男性の肥満の課題があるが、子どもの肥満も、高度経済成長期以降、増加傾向にある。いつでもどこでも食べ物が手に入る社会において、子どもであっても、主体的に食生活に関わらないと健康管理が難しい時代である。文部科学省が発表した「食に関する指導の手引-第二次改訂版-」におい

て、食に関する「学びに向かう力」の育成が掲げられた。これからは、子どもたちのこれからの社会とどう関わるか、社会をどう作るかの食育が必要である。



## 【略歴】

1989年 同志社女子大学 卒業

2001年 神戸女学院大学大学院 修了（人間科学修士）

2004年 お茶の水女子大学 生活科学部食物栄養学科 講師

2004年 京都大学大学院医学研究科 博士（社会健康医学）

2008年 お茶の水女子大学 准教授

2015年 お茶の水女子大学 教授（現職）

本報告は、以下の論文の内容をまとめたものである。

赤松利恵，渡邊紗矢（2023）高度経済成長期の学校給食－東京都の学校給食喫食者と学校栄養士を対象とした調査研究，国立歴史民俗博物館研究報告，241:149-179

以上